パラドックスの教え

si-ta

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
パラドックスの教え

【Ｎコード】
Ｎ００２８Ｘ

【作者名】
ｓｉ－ｔａ

【あらすじ】
明日香が父親を追って扉を潜った先は、『逆説世界』と呼ばれる異世界。ジョニーと名乗る奇怪な生物、仮面の襲撃者、謎の人間組織『黒百合』と一人戦う男――幾多の出会いが明日香を待っていた。

日常

「ただいま」
「おかえりなさい。遅かったわね」
午後九時、明日香（アスカ）が帰宅すると、台所から母――優美子が顔を覗かせた。
「文化祭の準備とかいろいろあってさ」
「遅くなるときは連絡しなさいって言ってるでしょ」
「心配し過ぎ。小学生じゃないんだから」
「でもちゃんとしなさい。いいわね？」
「はいはい、わかった」

適当に返事をしつつ、明日香は自分の部屋に向かった。自分の部屋といっても所詮狭いアパートだ。居間との境界は暖簾のみ。部屋の中も当然狭かった。
ベッドの上にスクールバッグを放り出し、制服からスウェットに着替える。居間の方から再び母親の声がした。
「ご飯、できてるわよ」
「今行く」
明日香が居間に向かうと、テーブルの上に二人分の食事が並べられたところだった。優美子はいつも、娘が帰ってくるまで自分も食事を取らずに待っていた。明日香は自分の定位置、母親の向かいの椅子に座る。
「いただきます」

二人は遅めの夕食を食べ始めた。必要以上に会話はないが、決して母娘の仲が悪いわけではない。むしろかなり良い方に入るだろう。

明日香は優美子と二人暮らしだった。父親はいない。今から十年前、明日香が七歳のときに彼は突然姿を消した。世間的には蒸発ということになるのだろうが、明日香も優美子もそうは思っていなかった。明日香は父親ほど強く、優しく、誠実で、そして家族を愛している人間を他に知らない。

父親の身に何かが起こったのだ。明日香はそう考えていた。あの父が自分の意思で姿を消すなど有り得ない。たとえ七歳までの記憶であっても、そう断言できる自信があった。

だから明日香は予想だにしていなかった。十年を経た今になって、失踪した父親と再び会うことになるなんて――。

扉

真夜中、明日香は目を覚ました。首を伸ばし、ベッドサイドに置かれた時計に目を凝らす。

「まだ一時にもなってないじゃん……」

珍しく父親の夢を見た。七歳の自分と父親が河原を散歩している、ただそれだけの夢。父親が失踪してしばらくは彼の夢をよく見ていたが、ここ数年はほとんどなかった。

瞼が重い。眠い。明日香は再び布団に潜り込んだ。

それから少し経って、明日香は何やら明るさを感じた。もちろん部屋の中は電気など点けていない。少々不機嫌になりながら、重い瞼を持ち上げた。窓の外が妙に明るい。真っ暗な路地が白い光に包まれていた。そもそも、そこにそれだけの光源自体あるはずないのだが、明日香はそのことまで頭が回らなかった。代わりに彼女の目は一人の人物を捉えていた。

「お父さん……？」

今、光の中を通り過ぎて行った人物。あの背格好や歩き方は間違いなく父のものだった。少なくとも明日香はそう思った。

明日香は咄嗟に玄関へ向かった。足によく馴染んだ古いスニーカーを履き、スウェット姿のまま外へ出る。明日香と優美子の部屋はアパートの二階だった。階段を駆け下りると、先程の白い光が見えた。

アパートの角を曲がり、光る路地の方に曲がる。距離は離れていたが、前方に父親の後ろ姿が見えた。

「お父さん！」

明日香は声を上げて追いかけたが、父親は足を止めなかった。聞こえないふりをしているのか、単に気付いていないのか。

あと数メートルというところまで追いついたが、父親は消えた。正確には目の前にある、巨大な扉の中へ入っていった。周囲を照らす強い光は、その扉の内側から発せられていた。眩し過ぎて中の様子は全く見えない。思わず足が竦んだ。そうしている間に、両側に開いている巨大な扉は徐々に閉まっていく。迷っている暇などなかった。何もせず立ち尽くしていたら、父に再会する機会を永遠に失う気がした。

明日香が光の中へ飛び込む。その直後、扉は完全に閉まり、そして幻のように消えた。路地は普段通りの暗闇に戻っていた。

奇妙な生き物

扉の向こうは、一面の光に包まれていた。その光の中をおちていく。眩さで何も見えないが、幻想的な世界。

落ちて、落ちて、どこまでも落ちて――――ふと気が付けばそこは森の中だった。十メートル近くあるのではないかと思うほどの高い木々に囲まれている。幾重にも重なる葉の隙間から漏れる陽の光。

「――……ふごっ、んー、んーっ！」

苦しげな声と同時に右足の下で何かが蠢いた。驚いて足を退けると、木の根に紛れていた灰褐色の物体が体を起こした。

「てめえ何しやがる！　いきなり俺を踏み付けるとは度胸じゃねえか！　いいか、俺様を踏んでもいいのはナイスバディ―な別嬪姉ちゃんだけだと決まってんだぞ！　……ってお前、聞いてんのかオイ！」

確かに自分と同じ言葉を喋っているが、その物体は明らかに人間ではなかった。動物と言って良いのかどうかもわからない。とにかく今まで見たことのないものだった。体長三十センチほどのそれを呆けたまま見下ろす。

形はこけしのように見えるが、顔らしきものは埴輪に近い。思い付きで後から付け足したような短い手を振り回したり、精一杯組んでみたりしている。じっと観察していると、ただの黒い穴に見えた目が瞬きをした。

「わ！」

「何がわ、だよ！　俺ァ聞いてんのかつってんだ！　――……ん、

お前ひょっとして……人間（ヒト）、か……？」

目の前のそれは急に威勢を失い、おどおどとした眼差しになった。言葉も尻窄みになっていく。

「ひょっとしなくても普通に人間だけど……」

「ぎゃあああ人間っ！　人間っ！」

答えるや否や、相手は絶叫した。強く目を瞑って顔を背け、さらには短い腕を顔の前に翳す。大袈裟に怖がっているのに逃げ出そうとしない、否逃げ出せないのは……足が生えていないからだろうか。

でもこんな珍妙な生物に驚かれる筋合いはない。「変なのが喋った！」と驚きたいのはこっちなのに。

「あの、とりあえずここ、どこ？　あと男の人知らない？　四十歳くらいの人なんだけど……」

「知らねっ！　俺、人間（ヒト）なんて知らねっ、見たこともねっ！」

刺激しないようにできるだけ優しい口調で尋ねたが、あまり効果はなかったようだ。とりあえずおかしな場所に来てしまった、というのは理解していた。けれど父とほとんど同じタイミングで、同じ扉を潜（くぐ）ったのだ。彼も近くにいるはず、と考えるのは普通のことだろう。

相手に話し掛けるのを一旦諦め、辺りを見回してみた。森はかなり広い範囲まで続いているようだった。木漏れ日と、森の中を吹き抜ける穏やかな風。とても居心地の良さそうな空間だが、自分たち以外に生き物の気配はない。僅かに聞こえてくる鳥の声も遥か遠くのようだった。

変な生き物の方に視線を戻す。そのとき、背後に迫る殺気立った気配を感じた。

襲撃者

背後に迫る気配を感じ、素早く後ろに飛び退いた。その俊敏さに驚きを感じる。相手の俊敏さに対してではなく、自他共に認めるほどの運動音痴であるはずの自分に、だ。

しかし驚嘆している場合ではない。襲撃者は容赦なく二撃目に移る。鋭い蹴りをぎりぎりのところで躱し、続いて繰り出されたこぶしを傍に落ちていた丈夫な木の枝で受け止めた。

相手は黒い装束に身を包んでいた。加えて顔には灰色の仮面。年齢も、男か女かすらも分からない。体つきは細いが、痩せ細っている感じではなかった。

「誰……？」

相手は何も答えることなく、一旦後ろに飛び退いた。軽やかで無駄のない、忍者を連想させるような身の熟(こな)し。そして軽く膝を曲げたかと思うと、飛び上がって再び突きを噛ましてきた。手に構えた木の棒に強い衝撃を感じる。

明日香は自分が逃げずに応戦していることに驚いていた。殴り合いの喧嘩なんて、物心ついてから一度もした記憶がない。武道の嗜みなども当然あるはずなかった。それなのに、頭で考えるまでもなく体が自然に動く。

完全に圧されているということはなかったが、確実に相手が優勢だった。それよりも不思議なのは、どうも自分が弱い様子ではないということだ。おかしな話だが、何も考えなくても体が的確に動く。まるで戦っているのが自分ではないような感覚さえする。

それでも圧されているのは、単純に相手が強かったからだ。

一応の武器を持っている明日香に対し、その敵は素手だった。武器は勿論のこと、防具すら身につけていない。相手が身に纏ってい

るのは黒装束と顔を覆う仮面、それだけだ。

「何者？　顔ぐらい見せ――」

明日香の言葉を完全に無視したまま、相手は華麗な上段蹴りを仕掛けてくる。めり、という音がしたかと思うと、明日香の握る太く丈夫な枝が折られた。

「……っ！」

次の瞬間、明日香は大木の根元近くに叩き付けられていた。そこに上から敵の影が迫り来る。明日香は折れて短くなった棒を必死で振り上げた。

何かに当たる手応えと同時に、カランと乾いた音が響く。見ると、相手の顔を覆う仮面の一部が割れて落ちていた。その破片を見る限り、仮面はごく薄い、脆い金属で作られているようだった。この程度では相手に攻撃を食らわせたとは言えないだろう。

しかし、何故か敵は攻撃の手を止めた。仮面を被った横顔が見える。損傷したのは反対側らしく、顔は明日香から見えないままだ。素顔を見せないように、意図的にその向きをとっているのだと何となく分かった。

襲撃者は結局最後まで無言だった。数秒の間じっとその場に立ち尽くし、やがて疾風（はやて）のように去って行った。力も然（さ）るものだったが、木々の間を飛ぶように走り去る様子は人間離れしていた。

一先ず助かったということになるのだろうが、安心できるはずはなかった。父親を追ってやってきた自分が、見知らぬ仮面の人物に殺されかける心当たりなど何一つない。

ジョニー・クレイ・ダンデライオン！

襲撃者が去ったあと、立ち上がることもできずに木の根元にもたれていた。多少の痛みはあるが、特に怪我はしていない。ただ状況が何も分からず、半ば放心状態だった。

「おーい、……だ、だだだ大丈夫かお前？」

間の抜けた声が近寄ってくる。先程の奇妙な埴輪のような何かだった。足は無いのかと思っていたが、短い手を振りながら、同じく短い足をせっせと動かして自分の元に駆け寄ってきた。どうやら敵と対峙している間、一人で安全なところに隠れていたらしい。

変な生き物は息を切らしながら自分の傍まで来ると――しゃがみ込んだ。しゃがみ込んだという表現が適切か分からない。正確には短い足が引っ込むように消えた。

「はぁ、はぁ……あれ、ハブじゃねえか。お前何だ？　人間（ヒト）のくせにあいつらの仲間じゃないのか？」

「知らないよ何にも。何、そのハブって？　埴輪くん知ってるの？　誰なの？」

埴輪は驚いたような表情を見せてから、やれやれ、というように短い手と首を振る。その偉そうな態度に若干いらっとしたが、この場はとりあえず飲み込んでおいた。

「お前、人間（ヒト）なのにマジで何も知らねえんだな。あの仮面野郎は『ハブ』ってんだ。『ハブ・仮面（ファントム）』なんて呼んでる奴らもいるけどな」

一人で頷きながら埴輪は語る。一旦言葉を区切ったかと思うと、

突然穴にしか見えない目を吊り上げた。

「てゆーか、何だその、『ハニワクン』ってのは！　まさかとは思うが俺のことじゃないだろうな！　俺様の名前はジョニーだ！　ジョニー・クレイ・ダンデライオン！　しっかり覚えとけ！」

「じょ、じょにー……？」

「ああ。『蒲公英（たんぽぽ）の貴公子（ジョニー）』とでも呼んでくれ。……ん、何？　イカした名前だって？　へへ、よせやい、照れるじゃねえか」

「誰もそんなこと……」

「ははっ、そんな褒めたって何も出ないぜ」

「……」

私は黙って立ち上がる。埴輪くん――本名ジョニー・クレイ・ダンデライオンは上機嫌で照れ笑いしながら頭を掻いていた。頬の辺りがほんのりと赤い。

「分かった分かった、もう分かったから、照れるだろ、やめろ。仕方ねえ、お前の名前も聞いておいてやるよ」

「……アスカだけど」

「アスカ、な。中々いい名前じゃねえか。ま、俺様ほどじゃないけどな」

何に満足したのか、うんうんと頷くジョニー。彼を見ながら私は溜め息を零した。

きっと異世界

「で……ジョニー、でいいの？　さっきの続き聞かせて？」
「ん？　続きって何のだ？」
「ハブ？　とかその仲間、とかいう話……」
「あー、ハブな、仲間な、うん」

ジョニーは短い腕を組んで首を傾げる。

「俺もそんな特別詳しいわけじゃねえぞ。けどな、『黒百合』っていう危ない組織があってだな、その組織の大半がお前ら人間（ヒト）なわけだ。さらに人間（ヒト）ってのはほぼ間違いなくその組織に入ってるってわけだ。……ま、お前みたいな例外もいるにはいるが、相当珍しいんだよな」

そこまで言って、ジョニーは私の方を見上げた。再び黒い穴を吊り上げる。

「てゆーかアスカ、お前何様のつもりだ！　しゃがみやがれ！　続き喋ってやらねえぞ！」
「あ、ごめん……」

立って会話をしていたため、当然体長三十センチのジョニーを上から覗き込むような形になっていた。ジョニーはそれが気に入らなかったらしい。私がかがむと、まだ見下ろす程度の差はあったが、ジョニーが真上を見上げなくても顔を見ることができるくらいにはなった。

「さっきの奴はハブ。ハブ・仮面（ファントム）とも呼ばれてる」

「それはさっき聞いた」
「……ん、そうだっけか？　あいつ――ハブは『黒百合』の諜報員らしい。けど実際のところ奴の任務はほとんどが暗殺だ」
「黒百合？」
「とりあえず果てしなくやべえ集団だ。お前一体何したんだよ。黒百合に目付けられるって、かなーりやばいぞ」
「知らないってば……。私ついさっきここに来たばっかだし、何にもしてないよ」
「ん、ついさっき？」

首を傾げるジョニーに、ここに来るまでの経緯を簡単に話した。父親を追って変な扉を通ってきたこと。そして光の中をしばらく落ちていったと思ったら、気付いたらこの森の中にいたこと。だからこの世界のことなんて何一つ知らないということ。私は『日本』の高校生だという説明をしたとき、ジョニーは不思議そうな表情を見せた。やはり、ここは元いた世界とは別の場所らしい。その考察も最後に付け足した。

とはいえ、だ。異世界からトリップしてきました、なんて言われて誰が信じるだろうか。私でもきっと信じないだろう。

しかし、予想に反してジョニーが疑う様子はなかった。それどころか、「ああ、やっぱりそうなの」と言わんばかりの反応だった。

面影

「――信じてくれるの？」
「信じるって、何をだ？」
「私が別の、異世界から来たってこと」
「信じるもくそもねえだろ。だってお前、人間（ヒト）じゃねーか」
「？」
「あー……アスカ何にも知らないんだったな。ここに元々人間（ヒト）はいないんだ。だからつまり、この世界にいる人間（ヒト）ってのは別世界から来てるもんなんだ。全員な」

要するに異世界から来たのは私以外にいくらでもいる、ということとか。少しだけ分かったような……でも分からないような。ジョニーの話しぶりを見る限り、先程の襲撃者についても『黒百合』についても、それ以上詳しいことは知らなさそうだ。
それでもジョニーは、他に聞きたいことはあるか、とでもいうように首を傾げている。ふと、襲撃を受ける前に聞きかけた質問を思い出した。

「……あ、そうだ。さっきも聞いたんだけど、男の人、見なかった？　ほとんど一緒にこっちの世界に来たはずなんだけど」
「男？　人間（ヒト）ってことだよな？　見てねえぞ。誰なんだ？」
「お父さんなの。私の――」

そこまで言って、言葉が止まった。視界の前方、少し離れた高台になっている辺りに人影を捉えたのだ。それは今まさに話をしていた父親の姿だった。逆光線で顔まではよく見えないが、木々の向こうにあるその姿は確かに――。

「……おい、アスカどこ行くんだよ！　ちょっと待ちやがれ！」

思わず走り出していた。後方からはジョニーの声が聞こえたが、今はそれどころではない。木の根や葉で埋め尽くされた柔らかい土の上を駆けていく。

あと五メートル、というところで足を止めた。陽の当たる小さな丘の上に、父の後ろ姿が見えた。こちらに背を向けて佇んでいる。再び一歩踏み出す。カサリ、という枯れ枝を踏む音に気が付いたのか、彼はゆっくりと私の方を振り向いた。

人違い

「お父さ――」

そう言いかけたところで口を噤んだ。ゆっくりとした動きで振り向く男性の顔は、父のものではなかったからだ。

最後に父親を見たのは十年も前の話。それ以来は写真の中の父しか知らない。だから、父親の顔を鮮明に覚えているかと聞かれると自信がない。それでも目の前にいるその男性は別人だとすぐに分かった。温厚な顔立ちをした父親とは似ても似つかない、いかにも神経質そうな目付き。第一、年齢が違いすぎる。失踪した時点で既に三十過ぎなのだから、今は四十を超えているはず。対して目の前のこの男性は恐らく二十代――どれだけ年長に見積もっても三十歳が限度だろう。

背格好と立ち姿だけは気味の悪いほど似ていたが、他人の空似というやつか。

「……誰だ、あんたは？」

男が口を開く。その声で我に返った。

「あ、その、ごめんなさい。人違いでした……」

普段、赤の他人に「お父さん」なんて呼びかけたなら、きっと恥ずかしさでいっぱいになるだろう。でも今回に関しては羞恥より落胆が勝っていた。

しげしげと自分のことを観察していた男の視線が後方に移った。後ろからエッホエッホというような声が聞こえ、私も背後を振り返る。

「何だあれは。あんたの連れか？」
「あれは……」

息を切らし、懸命に走るジョニーの姿が見えた。手足の短い彼は長い時間を掛け、ようやく私の足元まで追いついた。

「はあっ……はあっ……、全く、俺様を置いて、どっか行くとは、やるじゃ、ねえか……はあはあ。――って、ぎゃあああ、また、人間（ヒト）、出やがったあっ……！　逃げるぞアスカ！　やべえぞ！」
「あ、ちょっと待って……」
「ほぎゃあああああ！」

踵を返し逃げ出そうとするジョニー。私は彼を咄嗟に捕まえた。簡単に言えば頭を鷲掴み。彼が更なる悲鳴を上げるのも無理はない、と自分でも思う。それにしても見た目以上に重い。片手で持ち上げるのはこれが限界。その様子を眺めていた男が再び口を開いた。

「クレイ族か、随分と珍しいの連れてんな」
「クレイ族……？」
「お、俺のことだよ！　ジョニー・クレイ・ダンデライオン！　クレイ族の末裔だ！」
「ああ……。やっぱり珍しいんですね？」
「当たり前だ！　希少種なんだぞ俺は！」
「捕まえて売れば結構な金額になるな」
「ほらなんか危ないこと言ってるぜコイツっ！　早く逃げろアスカ！」

ジョニーは半ば涙目になっていた。頭を掴まれたまま、全力で手足をばたつかせる。

「まあ待て」

ジョニーとは反対に、ひどく冷静な男の声が響いた。その静かな威圧感に気圧されたのか、ジョニーはぴたりと動きを止める。男は続けた。

「とりあえず俺はあんたに興味はない。ついでに黒百合の人間でもない」

そう言ってから、男はジョニーから私の方に視線を移し、鋭い目をさらに細めた。

逆説世界と現世と

「――……ってことは、クドウさんも元々の世界……その、現世（うつしよ）、から来たんですか？」
「そういうことだ」

男性はクドウと名乗った。工藤龍介（クドウリョウスケ）というのが彼の本名らしい。クドウの話によると、ここは『逆説世界（パラドックス）』と呼ばれる世界で、反対に私が元いた世界は『現世（うつしよ）』と呼ばれるそうだ。

「あくまで『逆説世界（パラドックス）』ってのは俺たち人間から見た呼び名だ。この世界の住人からすれば、ここが現実世界になる。……あんたの名前も聞いておこうか」
「ジョ、ジョニーだ！」
「あんたじゃない」
「えっ！」

ジョニーはショックを受けた様子で、円い目をさらに円くしていた。が、クドウの反応はといえば冷たい。ジョニーに目をくれもしなかった。

「あ、アスカです。ササキ、アスカ」

そう述べてから簡単に漢字の説明をしたが、実際は必要なかったかもしれない。ササキは普通に書けば佐々木になるし、アスカは飛ぶ鳥の方ではないと言えば大概は明日香だと伝わるだろう。……そもそも相手に漢字まで理解させる必要があったのかと、説明してから私自身疑問に感じた。

幸いにというべきか、クドウが「別にどうでもいい」とか言って

遮ったりしなかったのはありがたいが――心の内ではどう思っているのやら。

「此処（パラドックス）のことを何にも知らないってことは、迷い込んできて日が浅いか……ついさっき飛ばされてきたか、そんなところだな」

「私、お父さんを追って来たんです。その、クドウさん知りませんか？」

「知らないな。……自分から来たクチか。変わり者だなあんた。こっちにいるほとんどの人間は意思とは関係なく飛ばされてきた不運な奴らだってのに」

「そうなんですか……？　クドウさんも？」

「いや、俺はあんたと同じ部類だ」

「じゃあ、クドウさんはどうして？」

「……あんたと似たようなもんだ。まあ、俺のことはいい」

クドウは一旦言葉を区切り、遠くに目を向けた。

本気で異世界に来てしまったらしい、という現実を何となく理解できてしまっていた。しかも妙に冷静な自分がいる。もちろん混乱はしてるけれど。あの扉を潜ったときから予感はあったというべきなのかもしれない。

黒百合（1）

「黒百合については知ってるか？」
「少し……ジョニーから聞きました」
「どこまで知ってる？」
「どこまで……だろ。やばい組織だとか、ハブだとか、そのくらいしか……」
「ハブ？　あんた、あいつに会ったのか？」

『ハブ』という名を出した途端、今までただ淡々と話し、どこか無関心に見えたクドウが食いついた。少なくとも私の目にはそう映った。

「会ったというか、いきなり襲われたというか……」
「よく殺されなかったな」
「死ぬとこでしたよ本気で……。やっぱり有名な人なんですか、あの人？」
「……ん、まあな。話を戻すぞ。黒百合について簡単に教えておこう」
「あ、お願いします」

『ハブ』について突っ込んできたのは誰だ、と言いたい気持ちにも駆られたが、黒百合という組織に関しても知っておいた方が良さそうだ。こう言っては申し訳ないが、正直ジョニーの説明ではほとんど何も分からなかった。

「黒百合は事実上の逆説世界（パラドックス）の支配者だ。その九割以上が人間で構成されている。奴らの目的は人間の制圧下に逆説世界のすべてを置くこと。言ってみれば人間至上の世を作るってことだ。ただし――

人間は元々こっちには存在しない。そんな『異端』が頂点に立とうとか言ってるんだ。当然、人間はこの世界では忌み嫌われている。まあしかし、ここの住人が人間を襲うなんてことはまずないから安心しろ。あんたも何となくは気付いているだろうが、逆説世界では人間の身体能力は大きく上昇する。人間に挑もうなんて馬鹿は滅多にいない」

「あ、そういえば……」

襲撃者・ハブに対抗したときの不思議な感覚を思い出す。クドウを父親だと勘違いして走ったときも、全く息が上がらなかったっけ。

クドウはさらに続けた。

「とはいえ他の人間の方があんたより遥かに強いだろう。人間を敵に回すのは極力避けた方が良い。まあ、俺が言えた話じゃないけどな。……それでもって、奴らの主立った仕事は『黒百合』に歯向かう可能性があると認められた個体、又は集団の除去。要するに殺すってことだな。それを行うために常に諜報員が目を光らせている」

理解はできた。似たような話はいろいろな場所で聞いたことがある。少しでも都合の悪い存在は早め早めに、ということだろう。でも酷い話だ。ジョニーがあれほどまでに人間を恐れるのも分かった気がする。

力が物を言う世界だから多少なりとも戦う術を身につけておいた方が良い――クドウはそんなことを語っている。彼の顔を見ていて、私はふと思った。私が現世で追ってきたあの人物は本当に父だったのだろうか、と。あの時私が追っていた人物も父ではなくクドウだったのではないだろうか。もしそうだとすれば、父親なんて初めからいなかった――。

「どうした？」

様子の変化に気付いたのか、クドウが怪訝そうに眉を顰めて私を見ていた。今頭を過ぎったことを、不安ながらも彼に話した。クドウは少し考えてから口を開いた。

「少なくともそれは俺じゃない。あんたの親父さんだとみていいだろう。俺にはこっちと現世を行き来する手段がない」

その言葉に少し安堵した。しかし、彼はさらに言葉を続けた。

「一つ、余計な情報を付け足しておくと――『黒百合』の人間には手段（それ）がある」

黒百合（2）

「クドウさんは父がその、『黒百合』の関係者だって言うんですか！？　私の父は絶対にそんな人じゃ――」

「落ち着けよ」

クドウの冷めた声が私の言葉を妨げる。

「これだけははっきり言っておく。あんたの親父さんが黒百合の人間である可能性は非常に高い」

「だから、私の父は……」

「俺が把握している限り、此処（パラドックス）にいる人間の数はざっと百余人。そのうち黒百合の仲間（メンバー）じゃないのは俺と、あんただけだ」

クドウは歪んだ笑みを浮かべた。自嘲の笑みか、あるいは私に対しての皮肉か。

「何人か、反黒百合の奴に会ったことはあるんだ。だが奴らはすぐに消された。一人残らずな。あんたも死にたくないなら黒百合に入った方がいい」

「い、嫌ですよ！　何でそんなおかしな組織に私が……」

人殺しをしているような危ない組織に誰が入りたいか、という話だ。まず普通に考えて怖い。それに、罪のない人をどうこうするなんて嫌だ。私は自分を善人だとも正義感が強いとも思わない。でも一般人として並程度の常識と道徳心は持っている、つもりだ。偽善者と言われればそれまでだけど。

「俺の言い方が悪かったかもしれないが、黒百合を悪だと思う必要

はない。逆説世界（パラドックス）ってのは人間（おれたち）にとって単なる幻像に過ぎない。黒百合の人間も、現世では良識ある一般人ばかりだ。頭も感覚も普通。入ればあんたの親父さんに会える可能性は十分あるし、命の危険は格段に減るだろう。いずれは現世に帰ることもできるはずだ。もちろん、そのときあんたに現世に帰りたいという気持ちがあればの話だがな」

少しだけ迷いが生まれた。父親に会いたいという思いは強いし、当然のことながら死ぬのは嫌だ。

「アスカぁ……、黒百合入る、なんて言わねえ、よな？　俺、信じてるからな？」

ふと足元を見れば、私の足に縋り付くような格好のジョニーと目が合った。しばらく静か過ぎて存在すら忘れかけていたが、クドウの言葉にすっかり落ち込み、怯えている様子だ。

「大丈夫。入らないよ」

とりあえず宥めようと、そう言ってしまってから思う。大丈夫？　何が？　全然大丈夫じゃない、多分。

しかし、足元のジョニーは安堵に満ちた表情でさらに強く足にしがみついていた。それを見ても、やっぱり入ります――なんて言えるほどの図太い神経は持ち合わせていないつもりだ。

第一、私の父が黒百合の非道な活動を認めるわけがない。父親が黒百合の人間ではなかった場合、もし私がそんな組織に入っていたら、単に父を悲しませるだけだろう。

「私は黒百合には関わらない」

自分自身に言い聞かせる意味も込めて、もう一度繰り返した。ジョニーは何やら感嘆の気持ちを長々と述べている。一方のクドウは大して興味もなさそうにそっぽを向いていた。

空飛ぶ少女

「さすがだ、アスカ、俺ァお前をちゃんと信じてたぞ。お前は他の人間（ヒト）とは何か違うってな。俺様の見込みは外れちゃいなかったってことだな、うん」

相変わらず、クドウとの間にはどこか重い沈黙が続いていた。一人で語り続けるジョニーの声だけが響く。彼の言葉に耳を傾けていないのは、きっとクドウも同じだろう。

「リョウちゃーん！」

その空気を打ち破るように、どこからか明るい声が聞こえた。軽く周囲を見回すと、翼をはためかせてこちらに向かってくる何かの影が見えた。

近付くにつれて、それが人間の姿をしていることがわかった。その人物はスピードを緩めることもなく一直線に迫る。そして着地する代わりに、クドウに抱き着いた。

「寂しかった！　リョウちゃん、心配したよ！」

「数時間前まで一緒にいただろ。でも丁度いいところに来た」

幼い少女の声だ。リョウちゃん、とはクドウのことらしい。確か彼の下の名前は、龍介（リョウスケ）とかそんな名前だったことを思い出す。

少女はクドウに抱き着くと同時に、彼の胸に顔を埋（うず）めた。クドウもそれに応えるように彼女の頭を軽く撫でる。その様子は親子や兄妹には見えない。どうやらそういう間柄らしい。相手は随分と幼い、小柄な少女。年齢は上に見積っても、精々十二、三歳だろう。このクドウという男、所謂ロリータコンプレックスというやつだろうか。

人は見掛けによらないな、と改めて思う。
少女が顔を上げると、クドウはゆっくりと彼女を地面に降ろした。地面に降ろされてようやくクドウ以外の存在に気が付いたらしく、少女はしげしげと私の顔を見つめてきた。整った、可愛らしいと言える顔立ちだが、自分と同じ人間とは少しだけ、しかし決定的に雰囲気が違う。赤茶の瞳は円らで大きいが、ほとんど白目の部分がない。リスやネズミなどの小動物を思わせるような目だ。口元からちらりと覗く歯も、獣とまでは言わないが、人間のものよりは鋭く尖っている。また、その小さな背中には一対の翼がちょこんと生えていた。大きさで見ると頼りないが、柔らかな鳥の羽とは異なり、固く丈夫そうなものだ。

「アスカ、こいつはレベッカだ。よろしくしてやってくれ」

クドウが少女を紹介する。何をどうよろしくするのか分からないが、とりあえず私も彼女に自己紹介の挨拶をしようとした。口を開きかけたとき、少女――レベッカがクドウを見上げ口を尖らせた。

「リョウちゃん、何、この女(ヒト)?」

修行の地へ

「――……というわけだ」
「ふーん……」

クドウは簡単に私の今現在の状況をレベッカに説明した。「こいつも反黒百合で――」という辺りは完全な間違いだ。黒百合に加わらないといっただけで、反黒百合だと宣言した覚えはない。とはいえ割り込んで訂正するほどのことでもないか。後から考えれば、この時点で反黒百合ではないと言っておけば、いろいろな状況が変わっていたかもしれない。
クドウが話し終えると、レベッカの目が再び私に向けられる。今度は先程より居心地の悪い視線だ。敵意、といえば少々大袈裟かもしれないが、好意的でないのは確かだ。

「で、あんた、行く当てはあるのか？」

そう尋ねられ、私は当然首を横に振った。それはクドウにとっても予想通りの反応だったらしい。大きく頷くと、彼はレベッカに向き直った。

「レベッカ、頼みがある。俺とこいつを例の場所まで連れて行ってくれ」
「別にいいけど。何で？」
「最低限の戦闘術は身につけさせる。護身もできないようじゃ困る。黒百合の奴らに一瞬で殺られて終わりだ」

戦闘術とか、殺られるとか、私聞いてませんよクドウさん。でもそんなことを口にして、独り置き去りにでもされたら堪らないので

黙っておく。
一つ、この世界の住人（正確にはクドウは違うが）の共通点を見つけた。ジョニーにしろクドウにしろ、雰囲気的にはこのレベッカという少女も――今一つ人の話を聞かないところがある、気がする。

「ふーん、ま、いいや。でもあたしも行くよ？　いいよねリョウちゃん？」

”リョウちゃん”に聞いているなら何故私の顔を見る、お嬢さん？

好きにしろ、とクドウのぶっきらぼうな返事が返ってくると、レベッカは笑みを見せた。

「りょーかいっ！　じゃ、パパ呼んでくるね」

「ああ、頼む」

そんな会話を交わしてから、レベッカは翼を広げ、どこかへ飛んで行った。

雨の夜は血に染まる

「ねえ、死ぬの怖い？　まだ死にたくないって思ってる？」

夜の闇に響く、甘ったるい女の声。女の前には力なく地に倒れたもう一つの影があった。彼女はその人物に覆い被さるような格好で相手の顔を覗き込む。

「今どんな気持ち？　やっぱり最後は家族に会いたくなったりするもの？」

女は首を傾げる。くっきりとした綺麗なアーモンド形の瞳が瞬きする。無邪気、という言葉が相応しいだろうか。そんな愛くるしい様子で、女はナイフを握っていた。刃先が月明かりを受けて鋭く光る。

彼女の下になった人物が微かに目を開いた。ぐったりとした様子で女の顔を見る。女は笑った。手に持ったナイフを相手の首筋にそっと触れさせる。最早相手は抵抗する素振りを見せなかった。その代わり、苦しげに口を開く。

「誰、に……指示された？」

「ないしょ。聞かなくてもシンさんならわかってるんじゃないの？　それより、ねえ、今誰に一番会いたい？　奥さん？　それともやっぱり娘さん？」

そう尋ねながら、ナイフの先で相手の首筋をなぞった。

「怖い？　どうして娘さんにちゃんと会わなかったの？　後悔してる？」

女は特に相手の返答を求めているというわけでもない様子だった。ただ純粋に頭に浮かんだ質問をつらつらと並べているだけ。そこに悪意はない。どこか楽しげな表情でナイフを弄び続ける。

それは突然だった。そして一瞬だった。地面に倒れた男の体から鮮血が噴き出す。

女は目を円くし、ナイフを持つ手を止めた。彼女はまだ何もしていない。相手の体から噴き出した血が、衣服や顔を汚す。女は何が起きたのか分からないといった様子で固まった。

「話が長過ぎだよ」

物腰の柔らかい、若い男の声がした。かしゃん、と刀を鞘に納める音が響く。ぽつぽつと雨が降り出していた。

「前にも言っただろう？　不必要に人を甚振るのは良くない」
「……こんなに血だらけにしちゃって。リンちゃん残酷。私ならもっと優しく、綺麗に喉を切ってあげるのに」
「君がいつまで経っても殺さないからだろう？　さあ、用は済んだ。濡れてしまうから戻るよ」
「リンちゃんのせっかち」

女は口を尖らせながらも素直に立ち上がった。血で汚れた女の頬を雨が濡らす。雨は急激に強さを増していた。

「ねえ、リンちゃん」
「何だい？」
「血って、不味いのね」

女の言葉に男は眉を顰めた。女はちらりと舌を出す。自分の顔についた血を舐めたらしい。

「血ってもっと美味しいかと思ってた。だって、こんなに真っ赤で綺麗なんだよ。リンちゃんもそう思わない？」

男はしばらく女の顔を見ていたが、何も言わず進行方向に顔を戻す。

「僕はわからない。……さあ、早く戻ろう。服も着替えたほうが良い」

女に背を向けて歩き出す。その背中に女も付いていく。

彼女からは見えないが、男は悲しそうな目をしていた。人を殺めたことを悔いているわけでも、死者に同情しているわけでもない。そんなことで彼は心を痛めはしない。男は心の中で小さく呟いた。

――君は狂ってる。

夢を見ない俺たちの日常（1）

「えーと、今から各担当区域の状況報告を始めるっス。……って人、こんだけっスか！？」

こうして黒百合（おれたち）の会議は始められた。これといって特別な内容のない、定例会議だ。サボる者も多い。黒百合全体の百数名のうち、この会議に出席することになっているのは約三割の三〇人弱。しかし今現在この場にいるのは十数人に過ぎない。

進行役を務めるのはたっちん。たっちんというのは愛称であり、本名はタツヤだ。名字までは記憶していない。少々気の弱い十九歳で、戦闘能力も中の下。しかし年上の女には可愛がられている。

「ま、とにかく始めるっスよ。今日はアキバさんから頼むっス」

「えー俺？　やだ、パス」

気の抜けた返事が響く。部屋の片隅に無造作に積まれたマットの上で足を組む金髪の若い男――アキバだ。軽薄で、黒百合一の遊び人だが、何故か会議には毎回出席している。ただし何もしない、本当にいるだけだ。不真面目で自分勝手な男だが、その長身と甘いマスクもあって女はにモテる。こいつに泣かされたという女の話は絶えない。それでも次々に女は寄ってくるらしい。つくづく神ってのは不平等が好きなようだ。

「『やだ、パス』じゃないっスよー……。ダメっス。異常無しならそれでいいっスから、何か頼むっス」

「じゃ、異常無―し」

「なんスかそれ……テキトーじゃないっスか」

「えー、たっちんがそれでいいっったんだろ？」

くだらないやり取り。しかしこれもいつものこと。なんとか報告をするよう促すたっちん。それに対しぶつくさと返すアキバ。二人の会話は続く。

コホン、と女の咳払いが響いた。その一瞬で場の空気が凍り付く。気弱なたっちんは勿論のこと、アキバですら口を開きかけたまま硬直した。

「ちょっと、よろしいかしら？」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0028x/

パラドックスの教え

2011年10月20日09時20分発行